



No. 178

ティーブレイク

Tea Break

映画「トップガン」の裏側に

会員 正林 真之

かのトム・クルーズ主演の「トップガン」。これを初めて見たのは確か学生時代の頃であったように思う。かなり昔だ。ただ、ときたま車の中で聞く曲の中にこの映画のサウンドトラックがあったため、当家的子供達は、まだ見たことがない映画にもかかわらず、その曲と「トップガン」という題名だけは知ることとなった。

これは、たまたま当家に子供として生まれてしまったことによる避けられない運命だと、そう親のほうはうそぶいているが、それを知っていたからといって何かと得になるわけでもないであろう。けれども、子供たちは家の中でそのDVDを見つけ、「へえ〜っ、本当にこんな映画ってあるんだね」ということで、休日の昼下がりに皆で見ることになった。これはある意味、子供を持つことによる大なる楽しみの一つでもある。

「トップガン」は、30年以上の歳月を経ても、少しも色あせていない。これを最初に見た当時は、確か少しだけカリフォルニアに居て、映画の設定場所となる地の近くであったように思う。それだけに昔の記憶も思い出され、誠に懐かしい気もするが、ただ自分自身は、その頃と比べて確実に30年の年をとっている。そしてその証拠に、着目するシーンや感動するシーンが微妙に違うのである。

この映画の中で、主人公のマーベリック（トム・クルーズ）は、ナンバーワンのパイロット「トップガン」を目指す。むろん、その候補に選ばれるわけだから、皆が自信満々である。自分こそがトップガンになれるのだと、そう信じて疑わない。ことに主人公には自信があり、別の事情とも相まって、何かと行儀の悪い目立つ行動を取りたがる。そしてそれは、真に実力のある者のみができる特権なのである。

学生だった自分にとってみれば、こうした行儀の悪い行動を取るのには、格好良く映った。では、今はどうかというと、完全にそれを肯定することはできない自分が居る。やはり30年の歳月が流れているのだ。

ところで、主人公のマーベリックは、この映画の中で、大なる挫折を味わう。そう、訓練中に相棒が死んでしまうのである。彼には妻と、まだ幼い子供が居た。そして主人公のマーベリックは、亡くなった彼そしてその家族と大変に親しくしていたのだ。むろん、一部はマーベリックの責任である。だが、彼には過失は全く無く、避けられない事故であったとして処理される。ある意味、少しでも責任を問われたのであれば、かえってそれが救いにもなったりしたのであろうが、全くの無罪であることが、かえって彼を傷つけることになってしまう。

そしてまた、実は、主人公のマーベリック自体も、幼い頃に、やはりパイロットであった父親と死別している。そしてその後に大変に苦労したがゆえに、相棒が遺した奥さんと息子が、その後どのような苦労をすることになるのかが、よく分かるのである。当然のことながら、彼は立ち直れない。

これに対して教官は、「この職業の宿命だ。早く忘れることだ」と諭す。けれども、主人公には、それが分かるはずもない。30年経った今となれば分かることだが、当時の私にも分からなかった。

そう、事務所を立ち上げた人なら誰でも経験することであるが、これから事務所が伸びようとしているまさにそのときに、所員が辞めたときの衝撃というのは、特にその最初のケースのときには、大いにショックを受けるものなのである。そして、ベテランの先輩や知り合いの経営者に相談に行くと、決まって言われるのが、この

「よくあることだ。そのうち、慣れる。早く忘れることだ」というものである。けれども大抵は、それを信じていることができず、かなりの間、挫折から立ち直れないものなのだ。

翻って、かつて弁理士試験の受験のための講師をしていたときには本当によく合格体験記を読んだものであるが、その中でもたった一つだけ、「自分の人生の中で最も輝いているのは、合格したそのときではない。人生最大の挫折の中から、それでも立ち上がろうと決意したあの時だ」というようなことが書かれてあったものだけを覚えていて。その当の本人が、なぜか今は当事務所の社員となっているが、実はこれを読んだ時の感動は大きく、それが今の組織を伸ばす原動力の一つにもなっていることから、彼には感謝してもきれないくらいのものである。

そう、挫折するまでは、誰でも大きな自信があるものだ。そしてまた、疲れるまでであったら、誰でも頑張ることができる。挫折してからでもなお頑張れること、そしてまた、疲れた後にこそ頑張れることこそが、専門職という仕事の全てなのではないかと、今となればそう思えるのである。

以前であれば、冷たいなあと考えた教官の言葉。そしてまた、挫折の後に起こした成功。更には、その過程で、亡くなった相棒の ID プレートを取りしめながら、苦悩とともに立ち直ろうとする様子。そしてまた、更には、その大事な ID プレートを海に投げ捨ててしまうシーン。これは当時に私には全く理解できなかった行動である。「一度空に出れば命がけ」。この職業観も、今となってみれば、本当によく理解できるのである。やはり 30 年が経っているのだ。

ちなみに高校とて、各中学校からの 1 番しか来ていないようなところでは、皆それぞれ、良い成績を取ることに限っては、大いなる自信があるはずである。けれども、1 番というのは一人しかいない。他の全ては大いなる挫折を味わうことになる。その子らがその挫折から立ち直って、どのような人生を送ることになるのかと思う。そして、ただ単に映画を楽しんでいる本人らの傍らで、親としては、そんなことを思いながら映画を見ている。そして、こんなことをこの子供らもいつかは知ることになるのだろうと、そしてまた是非ともそうあって欲しいものであると、心の底からそう思うのである。